

4. グローバル化とローカルな身体文化の活性化

—「沖縄」に関する新聞記事の内容分析を手がかりに—

岡本 純也

I. はじめに

わが家の食卓に沖縄料理のゴーヤー・チャンプルーが並ぶようになったのは、いつ頃からであろうか。初めて調査で沖縄を訪れた1990年代初頭、沖縄でゴーヤー（「ゴーヤ」とも）と呼ばれる、あのゴツゴツとした表皮をもったウリは、筆者の住む東京周辺の八百屋やスーパーでは姿を見ることはなかった。というのも、当時、沖縄産のゴーヤーは、ウリ類の害虫であるウリミバエの拡散を防ぐために県外へ持ち出すことが規制されていたからである¹⁾。したがって、ゴーヤーの炒め物であるゴーヤー・チャンプルーは——今でこそこのように説明するのもおかしいくらいに一般に知られるようになってきているのだが——、沖縄のローカル・フードの典型であり、沖縄でしか味わえない料理であったのである。それが、今では、夏になると自宅周辺の八百屋に、当たり前のようにゴーヤーは並ぶようになり、少し足を伸ばした百貨店で仕入れた沖縄豆腐と一緒に炒め、沖縄で食べるのと同じ姿のまま夕餉の一品として並ぶようになっている。

ゴーヤーは苦みをもった独特の味で知られており、食べ慣れない者にとっては抵抗のある食材であった。そのような食材が沖縄以外の地域（ヤマトウ）に浸透し、「集合的味覚の変化」をさえもたらしたのは、1990年代のヤマトウにおけるヘルシー・ブームと結びついた「沖縄ブーム」であると多田は説明する。

「メディアの健康言説が、沖縄料理の味覚評価をコロッと変えた。これまで長らく『まずい』と言われてきた食材や料理が、急に『おいしい』という評価に変わる、この集合的な味覚の変化はにわ

かには信じがたい。だがそれは、まぎれもない事実なのだ²⁾」。

ゴーヤーの事例が示すように、グローバル化³⁾された現在においては、われわれの食文化や味覚という身体感覚までもが、流通網の発達や情報量の増大に影響を受けて変化するようになる。そして、ヤマトウのライフスタイルや身体感覚の変化は、沖縄のローカルな姿の変化をも、当然、意味するのである⁴⁾。

では、ローカルな身体文化である民俗舞踊は、沖縄に関する情報量の増大、物の流通量の増大といったグローバル化の進行によってどのように変化していくだろうか。ここでは、沖縄で旧暦の盆行事の中で踊られるエイサーをとりあげ、「沖縄ブーム」の中でこの舞踊が消費文化としてヤマトウに浸透していく様子を、新聞記事のデータベースを手がかりとしてみていきたい。

II. 新聞記事にみる「沖縄ブーム」

グローバル化は大きなトレンドであり、「沖縄ブーム」なるものもわれわれの社会に生じた大きな変化である。その具体的な姿はどのように補足可能であろうか。ここでは新聞記事のデータベースを用いた「内容分析」を手がかりにその様子をみていきたい。

内容分析とは、「マス・コミュニケーション研究における代表的な実証研究の方法の1つであり、メディア・メッセージを統計調査に基づいて科学的に研究するために用いられる」手法である⁵⁾。内容分析には「利用可能なデータ available data」（書籍、雑誌記事、新聞記事などのデータベース）

が用いられ、その強みは「①調査されていることを意識した調査対象者が回答を変えてしまう『反応性』を回避できるという点、②大規模な現象の構造を把握することが容易であるという点、③長期に渡る現象を体系的に把握することが可能である点」にある⁶⁾。

今回は、まず、「沖縄」に関する情報量の変化を把握するために、全国紙である『毎日新聞』のデータベース「毎日 News パック」(1987年)を用い、「沖縄」というキーワードで検索を行い、1987年～2005年までの該当全記事をデータベース化した(総記事数 52,560 件)。

次に『朝日新聞』(「聞蔵」(1984年からの記事が検索可能))、『読売新聞』(「ヨミダス文書館」1986年9月からの記事検索が可能)、『毎日新聞』(「毎日 News パック」(1987年からの記事検索が可能))、『日本経済新聞』(「日経テレコン」(1975年4月からの記事が検索可能))の記事データベースを用い、「沖縄及びエイサーを含む記事」を抽出し、データベース化した(2005年までの総記事数 1,577 件)。

まずは「沖縄」に関する新聞記事を見ていこう。図1は『毎日新聞』における「沖縄」に関する新聞記事数ならびに沖縄の特産品に関する新聞記事数の年次推移を表したものである。

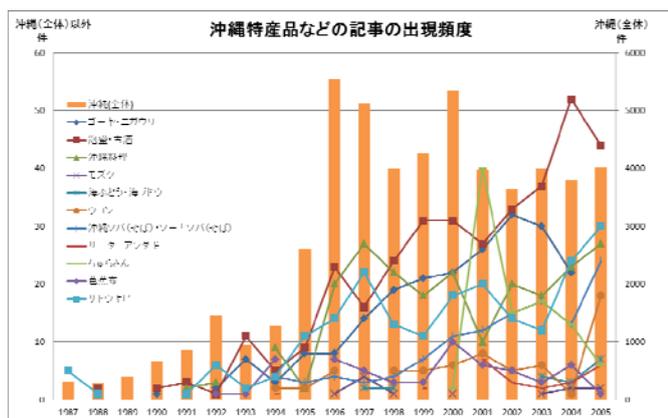


図1. 沖縄特産品などの出現頻度

「沖縄」に関する記事数の変化をみると(右側の目盛)1995年からその数が明確に増大し、1996年、1997年、2000年に著しい増加⁷⁾がみられる

が、1998年以降、およそ4,000件前後を推移しているのが分かる。ここからは、「沖縄ブーム」というものが1990年代後半に起こり、その後、継続しているということが読み取れる。「沖縄ブーム」は2000年代初頭からNHKのドラマ「ちゅらさん」(2001年)の影響で始まったとよく論じられるが、既に1990年代後半から情報量の増大は認められ、その大きな変化は一時的なものではなく、2000年代以降、継続されていると読み取ることができる。

社会学者の多田治は、「沖縄ブーム」をきっかけとして、ツーリスト(沖縄以外の者)が生活者(沖縄に住む者)の視点やライフスタイルを身につけていく、このような変化を『沖縄ブームから沖縄スタイル』への変容と呼んでいる。

「リピーターの増大や移住がブームとなるなか、ツーリストも生活者の視点やライフスタイルを徐々に身につけていく。私はこれを、『沖縄ブームから沖縄スタイルへ』の変容と呼んでいる。それは『非日常の日常化』であり、2000年代初頭のブームの段階を超えて、『沖縄の環境化』が進んでいく事態である。ニガウリでなく、ゴーヤーが夏野菜として受け入れられるようになり、沖縄固有の料理であったタコライスが、沖縄発であることさえ知られないまま、全国のカフェレストランなどのメニューに並んでいる現象は典型的だ⁸⁾。

多田が指摘する社会の変容は「ブーム」と呼べる状況から恒常的な状況への移り変わりであり、まさに「沖縄の環境化」である。「沖縄」に関する新聞記事数の変化からも、われわれが常に多くの沖縄についての情報にさらされる社会の中に生きており、この変化は不可逆なものとなっているということが読み取れる。

次に沖縄の特産品についての記事の出現頻度(左の目盛)についてみてみると、「沖縄」記事全体の増加と同様に1995年以降に増えていることが見て取れる。特に「泡盛・古酒(クース)」や「ゴーヤー・ニガウリ」に関する記事は著しい増加を示

している。これは、沖縄以外の地域において、身近な八百屋やスーパーにゴーヤーが並び、「コンビニ」で泡盛が手に入るようになった現状を表しているといえよう。

Ⅲ. 沖縄以外の地域のエイサーの増殖

近年、沖縄以外の地域においてエイサーを踊る団体が増えている。全国を統括する組織も存在しないためその実数は把握できないが、さまざまな場所でそれらの団体がエイサーを踊るようになっている。

沖縄以外の地域のエイサーについて、「担い手」「使用曲」「演舞発表の場」について調査した中津川祥子によれば、対象となった 24 団体の結成時期の特徴として「1996 年以降に」「発足のペースが上がっている」ということがあげられている⁹⁾。また、団体構成員の特徴として、「男女の制限がほとんどないこと」、「年齢制限を設けていないこと」、「居住地に関係なく入団できること」などがあげられ、それぞれに制限を設けている沖縄のエイサーの担い手（青年会）と対比させている。

図 2 は『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』、『日本経済新聞』のデータベースにみられるエイサー関連記事数の年次推移を表したものである。

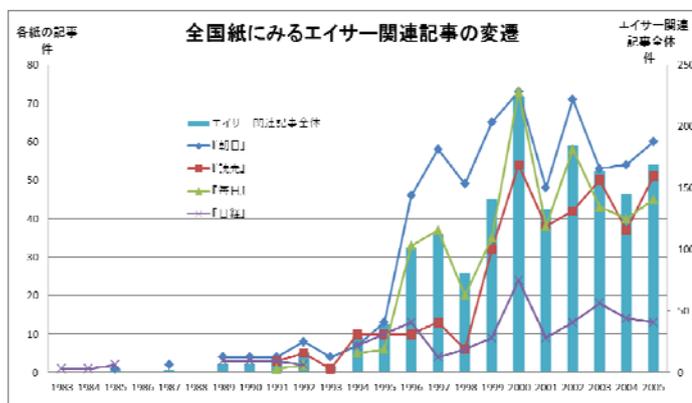


図 2. 全国紙にみるエイサー関連記事数の変遷

やはりこの図からも、エイサーに関する新聞記事数が 1996 年以降に増大していることが分かり、先に見た「沖縄」に関する記事件数の推移と連動

しているということが読み取れる。また、中津川の指摘にある、エイサー団体の発足が 1996 年以降にペースを上げているという傾向とも合致すると言える。

沖縄では、旧暦の盆に地域の家々を巡りエイサーは踊られる。もともと、盆に帰ってくる祖先の霊を供養するという意味で踊られる舞踊である。しかしながら、沖縄以外の地域には、それぞれの土地にあった盆踊りはあるものの、エイサーのような沖縄民謡に合わせながら太鼓踊りが巡るといふ風習はない。であるならば、沖縄以外の地域のエイサー団体は、どのような場で踊っているのだろうか。

先に見た中津川の調査では、「地域の祭り」、「教育機関での行事」、「結婚式」、「福祉施設」、「沖縄関連イベント」、「デパート」、「国際交流イベント」、「その他：チャリティーコンサート・会社パーティ」が踊りの場としてあげられており、中でも、「商店街の祭り・夏祭り」といった「地域の祭り」では、調査対象となった全ての団体がエイサーを踊っている¹⁰⁾。

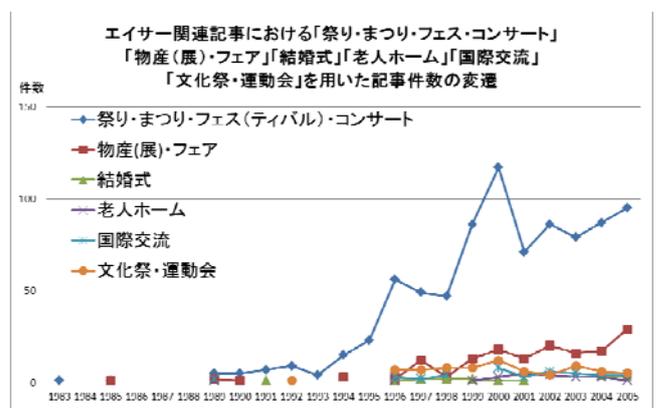


図 3. エイサーが踊られる場に関する記事の推移

図 3 はエイサーに関する新聞記事全体（四紙を統合したデータベース）の中で、「祭り・まつり・フェス（ティバル）・コンサート」、「物産（展）・フェア」、「結婚式」、「老人ホーム」、「国際交流」、「文化祭・運動会」といった言葉が使われている記事数の推移を表したものである。これらは、中津川の調査を参考に、エイサーの踊りの場に関係

する検索ワードを選んだのであるが、圧倒的に「祭り・まつり・フェス（ティバル）・コンサート」に関する記事が多く、そのような場でエイサーが踊られるようになっていることが分かる。

新聞記事を読むと 2000 年前後の時期に「沖縄」をテーマとした祭りが各地で催されるようになってきており、そのような場では沖縄の特産品が売られ、またエイサーが踊られている。たとえば、1999 年から始まった「沖縄フェスティバル in NAGOYA」、2000 年「沖縄フェスタ in 北九州」、2003 年「沖縄フェスティバル in 土浦」、2005 年「奈良沖縄フェスタ」などである。また、沖縄の民謡歌手や沖縄ポップの歌手などを集めた音楽の祭典「琉球フェスティバル」は、ルポライターの竹中労が主導者となって 1974 年、1975 年に東京で開催された後中断されていたが、1995 年に大阪で復活し、1996 年以降は毎年、大阪と東京で大規模に開催され、エイサーも踊られている。

現在では「沖縄」や「沖縄音楽」をテーマにしたイベントだけではなく、エイサーそのものをテーマにした「エイサー祭り」さえ、東京で開催されている。2000 年に始まった「町田エイサー祭り」と 2002 年に始まった「新宿エイサー祭り」である。これらの「エイサー祭り」は、沖縄から踊り手も招聘するが、大半の踊り手がヤマトウで活動するエイサー団体に所属する者であり、毎年、その数は数百人を超える。そして、それらの団体の演舞を見るために、毎年、数十万人の観客が集まるのである。

以上のような、「沖縄」をテーマにした、また、「エイサー」をテーマにした祭りでの演舞披露を主たる活動の目標として、ヤマトウのエイサー団体は日々練習を行っている。また、依頼があれば地域の祭りや百貨店で催される沖縄物産展などにも赴き、踊りを披露する。近年にみられる沖縄以外のエイサー団体の普及は、「エイサー祭り」も含み込む「沖縄」に関する都市的なイベントの増加が影響していると考えられる。今回は新聞記事のデータベースを手がかりに沖縄以外の地域へのエイサーの普及についてみてきたが、今後は祭りの

主催者の意図や踊り手がどのような点に魅力を感じているのかに着目し、民俗舞踊という身体文化の活性化について考えていきたい。

【注】

1) 和名ツルレイシと呼ばれるゴーヤーは、沖縄本島産のものは 1990 年まで、八重山地方産は 1993 年まで県外への持ち出しが規制されていた。

2) 多田治『沖縄イメージを旅する』中央公論新社、2008 年、174 ページ

3) ここでは、「グローバル化」をギデンズの定義するように、近代化の帰結として、離れた地域間の相互依存関係が強まっていくことであるとらえている。

アンソニー・ギデンズ、松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か？—モダニティの帰結—』而立書房、1993 年

4) 現在、沖縄でのゴーヤーの収穫量は 8,432 トンであり、全国の 33.4%を生産している（2008 年農林水産省調査）。2000 年の調査では収穫量は 6,205 トンであるので、8 年間で大きく作付面積も増やしていることになる。

農林水産省「地域特産野菜生産状況調査」2000 年及び 2008 年参照。

5) 有馬明恵『内容分析の方法』ナカニシヤ出版、2007 年、1 ページ

6) 松井剛「制度的同型化プロセスとしてのブーム：『癒し』ブームの内容分析」『商品研究』第 53 巻 3・4 号、2004 年、1~13 ページ

7) 1995 年 9 月に米兵による少女暴行事件が起きると、沖縄では反基地運動が激化し、県民総決起集会が 10 月に行われる。これを契機として基地問題をめぐる沖縄県と国とのやり取り、県民投票や候補地となった名護市の市民投票、市長選挙などが 1996 年、1997 年には多く報じられた。2000 年には、「九州・沖縄サミット」が沖縄県北部を会場にして行われ、サミットに関する報道が増えている。

8) 多田、前掲書、157 ページ

9) 中津川祥子「沖縄以外の地域におけるエイサー団体について」、『お茶の水音楽論集』9 号、2007 年、31-45 ページ

中津川の調査対象となった団体の結成時期をまとめると下記のようなになる。

～1989 年 1 団体

1990～1995 年 3 団体

1996～1999 年 6 団体

2000～2005 年 13 団体

10) 同上論文、39 ページ